

アリエッタ「鳥たちよ、毎年」K.307 および「淋しく暗い森で」K.308 —— アウグスタ（グストゥル）・ヴェンドリングとともに ——

野口秀夫

1. はじめに

鳥代：モーツァルトは 1777.10.30 から 1778.3.13 か 3.14 まで母とともにマンハイムに滞在しました。到着から数日後の 1777.11.8 にヴェンドリング一家に会ったことを父に宛ててこう書いています。

今日、食後ちょうど 2 時に、カンナビヒと一緒にフルートの名手ヴェンドリングのところへ行きました。そこでは、すべてが非常に丁寧でした。かつて選帝侯の愛人だった娘は、ピアノをとっても美しく弾きました。その後、私も演奏しました。今日は言葉では言い表せないほど素晴らしい気分でした。私はすべて暗譜で演奏し、生まれて初めて見たヴァイオリンの二重奏曲を 3 曲聴きました。作曲家の名前は未だに分かりません。皆がとても喜んでくれたので、私は——女性たちにキスをしなければなりません。娘には全く気遣い不要 nicht hart でした。彼女はややこしい人ではない kein hund からです。[ドイツ語原文から訳し直しました]

犬輔：その娘さんというのがエリーザベト・アウグスタ（グストゥル）・ヴェンドリング Elisabeth Auguste (Gustl) Wendling (1752-94) です。やはり到着してすぐの出来事を、1778.2.7 になってからですがこう報告しています。

ぼくはここに着いてすぐ、(娘さんの) グストゥル嬢のために、彼女のくれた歌詞でフランス語歌曲を作りました。彼女はそれをたとえようもなく見事に歌います。それをここにお贈りします。ヴェンドリング家では、毎日これを歌っています。みんなすっかり夢中になっています。[...] アリアのリストは彼女[アロイージア]のお父さんが写譜してくれたフランス語歌曲の上にあります。

鳥代：さらに 2 月 28 日の手紙からは、もう一曲作曲中であることが分かります。

娘さんにはさらに数曲のフランス語のアリエッタを約束していて、きょう取りかかりました。それらが完成したら、前の曲と同様に、小さな紙に写して送らしましょう。[ドイツ語原文から]

犬輔：最初の手紙の 1 曲がアリエッタ「鳥たちよ、毎年」K.307 で、あと数曲の内の 1 曲がアリエッタ「淋しく暗い森で」K.308 だと考えられるということなんですね。

教授：グストゥルがフランス語の歌詞を選んだのは、当時のマンハイムでフランス趣味が流行していたことの反映であろう。一方、モーツァルトがマンハイムの次にパリに行くことがレーオポルトの既定路線であったとはいえ、一曲目を作曲した時点ではまだフランス行きは現実味がなかったものと思われる。しかし、気が進まないパリ行きに重い腰を上げざるを得なくなる時期になってようやく、一曲目の発送報告と二曲目の作曲開始報告をしたのはフランスへの興味を示すことでレーオポルトのご機嫌を取るためだったと私は見ている (1778.2.14 には「ところで、フランス語のアリア、いかがでしたか？」と尋ねている)。

鳥代：このままにしておく、教授は早々に結論をまとめてしまいそうなので、わたしたちでグストゥルのことを調査し、歌詞の翻訳、曲の分析を進めましょう。

2. アウグスタ（グストゥル）・ヴェンドリングの生い立ち

犬輔：グストゥルは母ドロテーアから歌を学び、10 歳の 1762 年に、トンマーゾ・トラエッタのオペラ《ソフォニスバ》で主役を演じる母とともに、ソフォニスバの幼い息子役を演じ、短いアリアを歌いました。いくつかの喜劇オペラに出演し、17 歳の 1769.11 にはニコロ・ピッチンニの《ラ・チェッキーナあるいはよい娘》のチェッキーナ役を演じます^{注1}。この上演では母ドロテーアが女侯爵ルチンダ役を、叔母のエリーザベタ（リースル）が農婦サンドリーナ役を歌うという家族ぐるみの出演でした^{注2}。因みにローマにおける初演では彼女ら三人の役すべてをソプラノ・カストラートが異性装 (travesti) で演じていました^{注3}。

鳥代：その後の出演作品に関してはよくわかりません。叔母のエリーザベタ（リースル）と同姓同名のため叔母の上演記録に混在してしまっている可能性もあります。

教授：カール・テオドール Karl Philipp Theodor (1724-99)。プファルツ選帝侯 (在位：1742-77)、後にプファルツ・バイエルン選帝侯 (在位：1777-99) (右図) との関係はどうかね。

犬輔：選帝侯にはハイデック伯爵夫人ヨゼーファ・ザイフェルトという愛人がいて、彼女の 1 人の息子と 3 人の娘は皆カール・テオドールの実子でした。ヨゼーファは元バレリーナで、彼女と子供たちは選帝侯邸宅に快適な宮殿を提供されていました。モーツァルトはマンハイム滞在中、宮廷での正式な地位を得る可能性を高めるために子供たちにレッスンを提供していたのです。でも彼女は 1771 年に 23 歳で亡くなっていました。そこで、1772 年の初夏、選帝侯はエリーザベト・アウグスタと不倫関係になったのです^{注4}。



カール・テオドール

鳥代：その話の続きは曲の分析の後にしましょう。

3. アリエッタ「鳥たちよ、毎年」K.307 および「淋しく暗い森で」K.308 の構造

犬輔：曲を調べると、旧全集^{注5}と新全集^{注6}とで歌詞が異なることに気づきました。表 1 に K.307 の構造を示します。曲は非常に単純に構成されています。

表 1 アリエッタ「鳥たちよ、毎年」K.307 の構造

小節	旧全集 AMA	新全集 NMA	調性	形式
1-6	Oiseaux, si tous les ans 鳥たちよ、もし毎年	Oiseaux, si tous les ans 鳥たちよ、もし毎年	C	2/4 Allegretto
7-8	vous changez de climats, 君たちが 気候帯を変えるのが	vous quittez nos climats, 君たちが 私たちの土地を去るのが	↓	
9-11	vous changez de climats, 君たちが 気候帯を変えるのが	vous quittez nos climats, 君たちが 私たちの土地を去るのが		
12-13	dès que le triste hiver 陰鬱な冬が	dès que le triste hiver 陰鬱な冬が		
14-15	dépouille nos bocages; 森の木々を裸にするとすぐならば	dépouille nos bocages; 森の木々を裸にするとすぐならば	↓	
16-17	ce n'est pas seulement それはただ	ce n'est pas seulement それはただ	G	
18-19	pour changer de feuillages, 住む葉を変えるため でも	pour changer de feuillages, 住む葉を変えるため	↓	
20-23	ni pour éviter nos frimats; 霜から逃れるため でもない。	et pour éviter nos frimats; そして 霜から逃れるため ではない。		
24-25	mais votre destinée, 君たちの運命が	mais votre destinée, 君たちの運命が		
26-27	mais votre destinée 君たちの運命が	mais votre destinée 君たちの運命が	↓	
28-29	ne vous permet, 許しているのは	ne vous permet, 許しているのは	c	
30-31	ne vous permet d'aimer, 許しているのは	ne vous permet d'aimer, 許しているのは	↓	
32-34	qu'à la saison des fleurs. 花の季節にだけ愛することだ。	qu'à la saison des fleurs. 花の季節にだけ愛することだ。		
35-36	Et quand elle est passée, そしてその季節が過ぎると	Et quand elle est passée, そしてその季節が過ぎると	C	
37-38	vous la cherchez ailleurs, 別の場所を求める	vous la cherchez ailleurs, 別の場所を求める	↓	
39-42	afin d'aimer toute l'année; 一年中愛し続けるために。	afin d'aimer toute l'année; 一年中愛し続けるために。		
43-44	et quand elle est passée, そしてその季節が過ぎると	et quand elle est passée, そしてその季節が過ぎると		
45-46	vous la cherchez ailleurs, 別の場所を求める	vous la cherchez ailleurs, 別の場所を求める		
47-48	afin d'aimer, 愛するために、	afin d'aimer, 愛するために、		
49-51	d'aimer toute l'année, 一年中愛するために、	d'aimer toute l'année, 一年中愛するために、		
52-53	toute l'année. 一年中。	toute l'année. 一年中。	↓	

鳥代：この曲の自筆譜や父ヴェーバーによる筆写譜は紛失していて、ブライトコプフ&ヘルテル社の初版（1799年）^{注7}が底本となるのですが、歌詞について新全集校訂者のエルンスト・アウグスト・バリン〔従来はバリーンと呼んでいた〕Ernst August Ballin（1899-1988）はこう述べています^{注8}。「アインシュタインが再発見したこの歌の詩人はパリ出身のアントワヌ・フェラン Antoine Ferrand（1678-1719）である。彼は自身の詩集を編纂しておらず、むしろ様々なアンソロジーに散在している。K.307 のテキストはジャン・モネが編纂し 1765 年にパリで印刷された 3 巻からなる大規模な詩集『フランス歌曲選集、または 13 世紀から現代までの選りすぐりの歌曲集 Anthologie française, ou Chansons choisies, depuis le 13e Siècle jusqu'à présent』^{注9}にのみ掲載されている。モネのこのアンソロジーにはモーツァルトのフランス語アリア K.308 のテキストも収録されているため、両歌曲の原テキストは間違いなくこれであった。しかし、「原テキスト [モネの 1765 年詩集] と、モーツァルトの自筆譜に基づいて制作された B&H の初版との間には、テキスト上の相違が 2 点ある。これらのテキスト変更がモーツァルトによるものであるとは考えにくい。当時のモーツァルトは、このような変更を加えるほどフランス語の複雑さに精通していなかったことは明らかである。B&H のフランス語版の編集者であり、序文で言及されているヘリスベルク氏がこれらの変更の責任を負うと考えて間違いないであろう」とし、新全集の楽譜にはモネの 1765 年詩集の歌詞を採用したのです。一方、旧全集の歌詞は素直に B&H の初版に基づいています^{注10}。

犬輔：モネの 1765 年詩集にはこの曲を含む 3 曲の作者が De Ferrand となっており、注釈で「パリ出身で援助裁判所の顧問官であったアントワヌ・フェランは、さまざまな詩集に散りばめられた独創的で軽妙な詩を残し、1719 年に死去した」とありました。

鳥代：K.308 も見ておきましょう。さらに複雑な構造となっており、歌詞の異同も多く見られます。表 2 にまとめました。この曲にも自筆譜はなく、B&H 社の初版が底本となります。

表 2 アリエッタ「淋しく暗い森で」K.308 の構造

小節	旧全集 AMA	新全集 NMA	調性	形式
1-3	Dans un bois solitaire et sombre 人里離れた薄暗い森の中を、	Dans un bois solitaire et sombre, 人里離れた薄暗い森の中を、	As	AMA: C
4-6	je me promenais l'autre jour, 先日、私は歩いていました。	je me promenais l'autre jour; 先日、私は歩いていました。	f	テンポの 指定なし
7-9	un enfant y dormait à l'ombre, 木陰で子供が眠っていた。	un enfant y dormait à l'ombre, 木陰で子供が眠っていた。	b	NMA: C
10-12	c'était le redoutable Amour, それは恐ろしいキュービッドだった、	c'était le redoutable Amour, それは恐ろしいキュービッドだった、	As	Adagio
13-15	c'était le redoutable Amour. それは恐ろしいキュービッドだった。	c'était le redoutable Amour. それは恐ろしいキュービッドだった。	↓	
16-19	J'approche, sa beauté me flatte, 私は近づき、彼の美しさに魅了された。	J'approche, sa beauté me flatte, 私は近づき、彼の美しさに魅了された。	Es	
19-21	mais je devais m'en défier, しかし、私は彼に警戒すべきだった、	mais j'aurais dû m'en défier, しかし、私は彼に警戒すればよかった、	f	
21-23	mais je devais m'en défier; しかし、私は彼に警戒すべきだった。	mais j'aurais dû m'en défier; しかし、私は彼に警戒すればよかった。	es	
23-25	il avait les traits d'une ingrante, 彼は思知らずの女の顔立ちをしていた。	J'y vis tous les traits d'une ingrante, 私は彼に思知らずの女のあらゆる表情を見た。	↓	
25-27	que j'avais juré d'oublier, 私は彼女を忘れると誓っていた、	que j'avais juré d'oublier, 私は彼女を忘れると誓っていた、	f→g	
27-29	que j'avais juré d'oublier. 私は彼女を忘れると誓っていた。	que j'avais juré d'oublier. 私は彼女を忘れると誓っていた。	c	
29-31	Il avait la bouche vermeille, 彼は朱色の唇を持ち、	Il avait la bouche vermeille, 彼は朱色の唇を持ち、	↓	
32-33	le teint aussi frais que le sien, 彼女のように瑞々しい顔色をしていた。	le teint aussi beau que le sien, 彼女のように美しい顔色をしていた。	f	(36 小節は ドイツ増六 和音)
33-35	un soupir m'échappe, 私はため息を漏らした。	Un soupir m'échappe, 私はため息を漏らした。	↓	
35-37	il s'éveille, il s'éveille; 彼は目覚めた、彼は目覚めた。	il s'éveille, il s'éveille: 彼は目覚めた、彼は目覚めた。	g→c	
38-39	L'Amour se réveille de rien, キュービッドは些細なことで目を覚ます、	L'Amour se réveille de rien, キュービッドは些細なことで目を覚ます、	g	
40-41	l'Amour se réveille de rien. キュービッドは些細なことで目を覚ます。	l'Amour se réveille de rien. キュービッドは些細なことで目を覚ます。		
41-43	Aussitôt déployant ses ailes 彼は翼を広げるとすぐに、	Aussitôt déployant ses ailes 彼は翼を広げるとすぐに、	f	Allegro
43-45	et saisissant son arc vengeur, 復讐の弓を掴み、	et saisissant son arc vengeur, 復讐の弓を掴み、	es	
46-47	l'une de ses flèches, 矢の一本が	d'une de ses flèches, 矢の一本で	↓	
47-49	de ses flèches, cruelles, 残酷な矢の一本が、	de ses flèches, cruelles, 残酷な矢の一本で、	↓	
50-53	en partant, en partant. 彼が去るとき、去るとき	en partant, en partant. 彼が去るとき、去るとき	↓	
53-55	il me blesse au cœur, 私の心臓を傷つけた、	il me blesse au cœur, 彼は私の心臓を傷つけた、	Es	AMA: Adagio
55-57	il me blesse au cœur. 私の心臓を傷つけた。	il me blesse au cœur. 彼は私の心臓を傷つけた。	↓	NMA: 指示なし
58-62	Va! va, va, va, dit-il, 「行け、行け、行け、行け」と彼は言った。	Va, va, va, va, dit-il, 「行け、行け、行け、行け」と彼は言った。	As	Presto
63-64	va, dit-il, 「行け」と彼は言った。	va, dit-il, 「行け」と彼は言った。	As	AMA: Allegro
64-65	aux pieds de Sylvie, 「シルヴィの足元で	aux pieds de Sylvie, 「シルヴィの足元で	↓	NMA: Primo
66-68	de nouveau languir et bruler! 再び衰弱し、燃え尽きるのだ!	de nouveau languir et brûler: 再び衰弱し、燃え尽きるのだ!	Ea	Tempo
69-71	Tu l'aimeras toute ta vie, お前は一生彼女を愛するだろう、	Tu l'aimeras toute ta vie, お前は一生彼女を愛するだろう、	b	
72-74	pour avoir osé m'éveiller, 俺を大胆にも目覚めさせたゆえ、	pour avoir osé m'éveiller, 俺を大胆にも目覚めさせたゆえ、	f	
75-77	pour avoir osé m'éveiller. 俺を大胆にも目覚めさせたゆえ。	pour avoir osé m'éveiller. 俺を大胆にも目覚めさせたゆえ。	As	

分かる限りで異同の解説をすれば「(あの時) ~すればよかった」という表現が「J'aurais dû+ 不定詞」、「(あの時) ~すべきだった」という表現が「devais+ 不定詞」です。また bruler と brûler はいずれの綴りでもよく、綴りを縮約するかしないかも発音に関係しない限りいずれでもよいでしょう。その他、単語の異同は意味を変えるためのものですが、これについては AMA の歌詞の方が洗練されているようにわたしには思われます。

犬輔：この歌の詩人はアントワヌ・ウダール・ド・ラ・モット Antoine Houdart de la Motte (1672-1731) であり、パリで活躍し、オペラやバレエの作詞家として知られていました^{注11}。この詩の初出は彼の最初の詩集「Dxxx 氏の抒情詩 Odes de M. Dxxx.」(パリ 1707 年) ですが、新全集は K.307 と同様モネの 1765 年詩集の方を原テキストとして採用しています。



ド・ラ・モット

鳥代：ところがバリンはそのモネの 1765 年詩集では 1 行目が Dans un lieu solitaire となっているにもかかわらず、Dans un bois solitaire を採用しています。その理由を「原文 [=モネの 1765 年詩集] の lieu とは対照的に bois という読み方は明らかにモーツァルトに由来する。モーツァルトによるこのテキストの変更は、1799 年のブライトコプフの全集の目次にあるモーツァルトの自筆譜から転載された歌曲タイトル (歌曲の冒頭) における同一の読み方、アンドレ、グライスナー、グライスナー=アンドレによるリストの冒頭、そして最後に 1799.2.25 付のコンスタンツェから B&H への手紙の引用によって証明されている」からだとしています。

犬輔：コンスタンツェが挙げた楽譜のリストの 10 番目は図 1 のとおり確かに bois となっています。

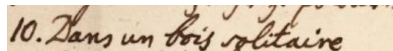


図 1 1799.2.25 コンスタンツェが B&H 社に宛てた楽譜のリストから第 10 番

鳥代：その論理で行くならこれはどうでしょう。4 番目が Oiseaux, si tous les ans vous changez de climats となっています。なのにバリンは K.307 にこれを採用していないのですよ！

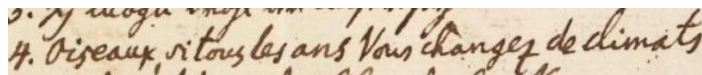


図 2 1799.2.25 コンスタンツェが B&H 社に宛てた楽譜のリストから第 4 番

教授：図 1 および図 2 は B&H および旧全集の歌詞の方がモーツァルトの意図であることを強く示唆している。少なくとも B&H の編集者が変更したのではないことの証拠にはなる。

犬輔：参考までにバリンが金科玉条の原典としているモネの 1765 年詩集を見ておきましょう。



図 3 モネ編纂『フランス歌曲選集、または 13 世紀から現代までの選りすぐりの歌曲集から

鳥代：楽譜付きで載っているのですね。バリンは「淋しく暗い森で」の楽譜冒頭 (譜例 1) に関して「旋律的・リズムの特徴、そしてアラ・ブレーヴェとイ短調一変イ長調において、モーツァルトの作品 K.308 の冒頭部分 (譜例 2) と類似している」と述べています。

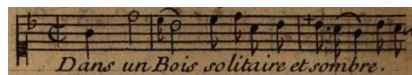


譜例 1 モネの 1765 年詩集 (図 3) から
「淋しく暗い森で」の楽譜冒頭



譜例 2 新全集アリエッタ
「淋しく暗い森で」K.308 の冒頭

犬輔：そんなに似ているとは思えませんが、1730 年にテアトル・ド・ラ・フォワールで上演された《海のアムール L'Amour Marin》というコミックオペラ内で歌われた曲として、二短調の楽譜がありました^{注12}。同じメロディ・リズムで古くから歌い継がれてきたことがわかります。グストゥルは暗唱していてモーツァルトのために口ずさむことができたかもしれません。



譜例 3 《海のアムール L'Amour Marin》から

鳥代：ほら、1730 年にすでに *bois* になっているではないですか。

教授：鳥代さんは不満だらけだ。いっそのこと歌詞の異形を網羅的に調査してはどうかね。

鳥代：はい、やってみましょう。

犬輔：えっ、やめた方がいいですよ。フランス語ですから大変なことに。

鳥代：お手の物よ……（暫くあって）お待ちどおさま。表 3 が出典ごとの歌詞異形 variant です。

表 3 K.307 および K.308 の歌詞異形

K 番号	連行	異形	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	
K.307	I, 1	vous quittez nos climats								●					○	
		vous changez de climats											●	○	○	
	I, 4	et pour éviter									●				○	
		ni pour éviter											●	○	○	
K.308	I, 1	Dans un lieu	●	●	●	●	●	●		●						
		Dans un bois								●		●	○	○	○	
	I, 2	l'autre jour	●	●	●	●	●	●		●	●	●				○
		l'autr' jour												○	○	
		seul un jour								●						
	II, 1	beauté me flate	●	●	●	●		●	●	●	●	●	○	○	○	
		bouche me flate					●									
	II, 2	mais j'aurais dû (古綴)	●	●	●	●	●	●	●	●	●					
		mais j'aurais dû														○
		mais je devois (古綴)											●	○		
		mais je devais													○	○
	II, 3	j'y vis tous les traits	●	●	●	●	●	●		●	●					○
		je vis tous les traits								●						
		il avoit les traits (古綴)											●	○		
		il avait les traits													○	
	III, 1	sa bouche vermeille	●	●	●	●	●	●					●			
		la bouche vermeille								●	●	●		○	○	○
	III, 2	le tein[t] aussi vif	●	●	●	●	●	●	●							
		le teint aussi beau									●	●				○
		le teint aussi frais											●	○	○	
	IV, 3	d'une de ses flèches (古綴)									●					○
		d'une de ses flèches (古綴)	●	●	●	●	●	●	●				●			
		d'une de ses flèches										●				
		l'une de ses flèches												○	○	
IV, 4	il perce mon cœur	●	●	●	●	●	●									
	il me blesse au cœur								●	●	●	●	○	○	○	

- ① De La Motte, Antoine Houdar (1707a). Odes de M. Dxxx (Dxxx 氏の抒情詩), Paris, 1707 注¹³
- ② De La Motte, Antoine Houdar (1707b). Odes de Mr. De la Motte (ド・ラ・モット氏の抒情詩), Amsterdam, 1707
- ③ De La Motte, Antoine Houdar (1709). Odes de M. de La Motte (ド・ラ・モット氏の抒情詩), Seconde ed., Paris, 1709 ∞
- ④ De La Motte, Antoine Houdar (1711). Odes et autres ouvrages de Mr. De la Motte (ド・ラ・モット氏による抒情詩その他の作品), 3 ed. Amsterdam, 1711
- ⑤ De La Motte, Antoine Houdar (1713/14). Odes de M. de La Motte de l'Academie Françoise (フランス学士院会員ド・ラ・モット氏による抒情詩), 4 ed. Paris, 1713/14
- ⑥ De La Motte, Antoine Houdar (1754). Oeuvres de Monsieur Houdar de La Motte (ウダール・ド・ラ・モット氏の作品), Tome 1, Paris, 1754 ∞
- ⑦ Le Chansonnier français (フランス歌曲集), Tome 1 (1760) (楽譜付き) ∞
- ⑧ Monnet, Jean (1765). Anthologie francoise, ou Chansons choisies, depuis le 13e Siècle jusqu'à présent (フランス歌曲選集、または 13 世紀から現代までの選りすぐりの歌曲集), Tome 1, Paris 1765 ∞
- ⑨ De La Porte, Joseph (1770). Le porte-feuille d'un homme de gout (趣味の良い男のポートフォリオ), Tome second, Amsterdam & Paris, 1770 ∞
- ⑩ Sabatier, Antoine (1770). Dictionnaire de littérature (文学辞典), Paris, chez Vincent, 1770 ∞
- ⑪ XXX Gesänge mit Begleitung des Pianoforte, Leipzig: Breitkopf & Härtel (1799) ∞
- ⑫ Nottebohm, Gustav (1877). Mozarts Werke, Serie VII: Lieder und Kanons, Bd.1, Leipzig: Breitkopf & Härtel (1877) ∞ ∞ および Goldsack, Christopher (2015/16). Singing in French, lower voices (2015) & higher voices (2016), The Melody Treasury ∞ ∞
- ⑬ Ballin, Ernst August (1963/64) NMA III/8: Lieder, Notenedition (1963) & Kritischer Bericht (1964) ∞ ∞

教授：よくやった。これをベースに議論を進めなさい。

犬輔：表 3 のおかげで新全集が⑧と⑬の組み合わせであることが一目で分かります。一方で B&H の初版が⑩と⑪の組み合わせではないかという説が新たに浮上します。

教授：⑩は文学辞典であるゆえ、この表に加えられていることには違和感があるが、どのような形で詩作品が掲載されているのか、鳥代さんに説明してもらおう。

鳥代：この辞典は著者によれば「雄弁術、詩、文芸に関するあらゆる事柄が論じられ、精神のあらゆる営みにおいて遵守すべきステップと規則が教えられる」目的で編集されています。辞典ですから「歌曲 CHANSON」という項目建てがなされており、そこには「歌には様々な種類があるが、一般的にはバッカスの歌、エロティック歌、そして風刺歌の 3 つに集約される」と書かれています。それらの詳細が説明されているページを訳してみましょう。

<p>Les chansons bacchiques doivent avoir un caractere particulier de liberte & d'enjouement: on peut même y passer quelques traits d'une imagination hardie, & quelques petits écarts. Il n'est pas surprenant que le Dieu de la treille échauffe un peu plus que de raison ceux qu'il inspire, & que le vin mêle une petite dose de délire dans l'enjouement qu'il fait naître.</p>	<p>バッカスの歌は、自由と遊び心という独特の性格を持つべきである。大胆な想像力を少しばかり発揮したり、少しばかりの逸脱をしたりしても構わない。ブドウの神が、その神に感化された人々を理性以上に熱狂させ、ワインが生み出す陽気さに少しばかりの陶酔感を加えるのは、驚くべきことではない。</p>
<p>Les historiettes, les fictions font un effet merveilleux dans les chansons bacchiques. Un cadre de cette nature, quand il est analogue au Dieu du vin, les rend toujours plus gaies & plus intéressantes. On peut aussi faire usage de la Mythologie, pour donner plus de noblesse au sujet. Peu de Poètes l'ont employée avec autant de succès que maître Adam, dans la chanfon fi connue, Auffitôt que la lumiere, &c. Nous allons en citer quelques-unes qui le font moins, mais qui sont dignes de l'être des lecteurs sensibles & délicats. Les deux premieres sont galantes & bacchiques eri même tems.</p>	<p>短編小説やフィクションは、バッカスの歌において素晴らしい効果を発揮する。このような人物がワインの神に例えられるとき、歌は常に陽気で興味深いものとなる。神話を利用して主題に高貴さを与えることもできる。アダム師ほどこの手法を巧みに用いた詩人はほとんどいない。アダム師は有名な歌「光が差すとすぐに」などでこの手法を用いている。ここでは、それほど効果的ではないものの、感受性豊かで洞察力のある読者の注目に値する作品をいくつか紹介しよう。最初の 2 つは勇ましく、バッカス的である。</p>
<p style="text-align: center;">CHANSON.</p> <p>En vain je bois pour calmer mes alarmes, Et pour chasser l'amour qui m'a surpris; Ce font des armes Pour mon Iris: Le vin me fait oublier ses mépris, Et m'entretient feulement de ses charmes.</p>	<p style="text-align: center;">歌曲</p> <p>恐れを鎮めようと酒を飲んでも無駄だ。 不意に襲ってきた恋を追い払おうとも。 私は武器を作る。 愛しいアイリスのために。 ワインは彼女の軽蔑を忘れさせ、 彼女の魅力を囁く。</p>
<p style="text-align: center;">AUTRE. (Rochebrune.)</p> <p>Vous n'avez pas, verte fougère, L'éclat des fleurs qui parent le printemps; Mais leur beauté ne dure guère : Vous êtes aimable en tout tems. Vous prêtez des secours charmans Aux plaisirs les plus doux qu'on goûte sur la terre Vous fervez de lit aux amans; Aux buveurs vous servez de verre.</p>	<p style="text-align: center;">もう一つ (ロッシュュブリュン)</p> <p>緑のシダよ、君には 春を飾る花々のような輝きはない。 しかし、花々の美しさは儂い。 君はいつだって愛らしい。 君は魅力的な助け手となり、 地上で味わう最も甘美な喜びを。 恋人たちの寝床となり、 酒を飲む者にはグラスとなる。</p>
<p>Pour bien entendre le dernier vers de cette jolie chanson, on doit sçavoir que le verre se fait de la cendre de l'herbe qu'on nomme fougere.</p>	<p>この美しい歌の最後の節を完全に理解するには、グラスはシダと呼ばれる草の灰から作られることを知っておく必要がある。</p>
<p style="text-align: center;">AUTRE.</p> <p>Voulez-vous sçavoir, mesdames, Pourquoi tant d'amans vaincus Eteignent toutes leurs flammes Dans le doux jus de Bacchus ? De tant d'amans infidèles Voici la juste raison : Vous n'êtes pas toujours belles, Et le vin est toujours bon.</p>	<p style="text-align: center;">もう一つ</p> <p>女性の皆さん、知りたいですか？ なぜこれほど多くの失恋した恋人たちが バッカスの甘い酒で 情熱の炎を消し去るのか？ 多くの不貞な恋人たちの 本当の理由はこうです。 あなたはいつも美しいわけではない、 そしてワインはいつだって美味しいのです。</p>
<p>Qui pourroit n'être pas agréablement touché du couplet suivant, qui réunit le genre galant au genre bacchique? Il fut fait & chanté par M. le C. de B*** dans une fête que donnoit madame de ***</p>	<p>勇壮なスタイルとバッカス的なスタイルを融合させたこの詩に誰が心を動かされないだろうか？これは、マダム・ド…が開いたパーティで、M. le C. de B…によって作曲され、歌われたものである。</p>
<p>La maîtresse du cabaret Se devine sans qu'on la peigne : Le dieu d'amour est son portrait, La jeune Hébé lui fert d'enseigne; Bacchus affis sur son tonneau La prend pour la fille de l'Onde; Même en ne versant que de l'eau, Elle a l'art d'enyvrer fon monde.</p>	<p>酒場の女主人は 言葉で説明しなくても、その姿が分かる。 愛の神は彼女の肖像であり、 若きヘーベ [若さの女神] は彼女の象徴である。 樽の上に腰掛けたバッカスは、 彼女を波の女神の娘と見間違える。 たとえ水を注ぐだけでも、 彼女は周囲の人々を酔わせる術を知っている。</p>

On appelle chansons érotiques celles dont l'amour & la galanterie fournissent le sujet. Rien n'est plus commun dans notre langue, que cette espèce d'odes anacreontiques; & l'on peut assurer que nous en avons d'excellentes & de parfaites; mais elles ne font telles, qu'autant que les pensées en font fines, les sentimens délicats, les images douces, le style leger, & les vers faciles. C'est sur-tout dans ces petites pièces qu'il faut être naturel & élégant. L'esprit ne doit point s'y faire fentir; le cœur seul doit inspirer le poète. Voyez ÉROTIQUE.

La chanson érotique tire son principal agrément des images & des traits de la fable que le poète a soin d'y répandre. C'est dans la finesse de ces rapports, & dans le beau des allusions, que confite tout son art. Une fiction ingénieuse, qui rassembleroit toutes les parties d'une chanson sous un seul point de vue, la rendroit plus intéressante que celle dont les pensées n'auroient pas une liaison si intime. L'ode suivante réunit, ce me semble, toutes les qualités qui en peuvent faire un modèle.

CHANSON ÉROTIQUE.

(M. de la Motte.)

Dans un bois solitaire & sombre
Je me promenois l'autre jour :
Un enfant y dormoit à l'ombre;
C'étoit le redoutable Amour.

J'approche: sa beauté me flatte;
Mais je devois m'en défier:
Il avoit les traits d'une ingrante
Que j'avois juré d'oublier.

Il avoit sa bouche vermeille,
Le teint aussi frais que le sien.
Un soupir m'échappe; il s'éveille :
L'Amour se réveille de rien.

Aufsi-tôt, déployant ses ailes,
Et saisissant son arc vengeur,
D'une de ses flèches cruelles,
En partant, il me blesse au cœur.

Va, dit-il, aux pieds de Sylvie,
De nouveau languir & brûler;
Tu l'aimeras toute ta vie,
Pour avoir osé m'éveiller.

On peut dire qu'il n'y a rien dans Anacréon qui approche de cette chanson. Nous l'emportons, dans ce genre de poésie, sur les anciens & les modernes. « Je suis étonné, dit M. de Voltaire, de cette variété prodigieuse avec laquelle les sujets galans ont été traités par notre nation. On diroit qu'ils font épuisés, & cependant on voit des tours nouveaux; quelquefois même il y a de la nouveauté jusques dans le fond des choses, comme dans cette chanson :

Oiseaux, si tous les ans vous changez de climats,
Dès que le triste hyver dépouille nos bocages,
Ce n'est pas seulement pour changer de feuillages s'
Ni pour éviter nos frimats;
Mais votre destinée
Ne vous permet d'aimer qu'à la saison des fleurs;
Et, quand elle a passé, vous la cherchez ailleurs,
Afin d'aimer toute l'année.

Peut-on voir rien de plus vif, de plus galant, de plus délicat que la Chanson que voici ?

Je vous l'ai dit cent fois, mes yeux, vous me perdez;
Vous ne voulez pas vous contraindre!
Des attrait de Philis vous avez tout à craindre;

エロティック歌とは、愛と風雅さを主題とする歌である。私たちの言語において、この種のアナクレオンの抒情詩ほど一般的なものはない。そして、私たちには優れた完璧な抒情詩がいくつかあることは間違いない。しかし、それらは、思考が洗練され、感情が繊細で、イメージが穏やかで、文体が軽やかで、詩が平易である限りにおいてのみ成り立つ。特にこれらの短い作品においては、自然で優雅でなければならない。心を無理強いするのではなく、心のみが詩人を鼓舞しなければならない。『エロティック』の項を参照のこと。

エロティック歌の最大の魅力は、詩人がそこに織り込むイメージと筋書きの細部にある。こうした結びつきの繊細さと、暗示の美しさにこそ、その芸術のすべてが宿っている。歌のあらゆる要素を一つの視点のもとにまとめ上げる巧みな創作は、そうした要素が密接に絡み合っていない作品よりも、はるかに興味深いものとなるだろう。そして、これから紹介する頌歌は、まさにその模範となる資質をすべて備えているように思われる。

エロティック歌

(ド・ラ・モット氏)

人里離れた薄暗い森の中を、
先日、私は歩いていた。
木陰で子供が眠っていた。
それは恐ろしいキューピッドだった。

私は近づき、彼の美しさに魅了された。
しかし、私は彼に警戒すべきだった。
彼は恩知らずの女の顔立ちをしていた。
私は彼女を忘れると誓っていた。

彼は朱色の唇を持ち、
彼女のように瑞々しい顔色をしていた。
私はため息を漏らした。彼は目覚めた。
キューピッドは些細なことで目を覚ます。

彼は翼を広げるとすぐに、
復讐の弓を握み、
残酷な矢の一本で、
彼が去る時、私の心臓を傷つけた。

行け、と彼は言った。シルヴィの足元で
再び衰弱し、燃え尽きるのだ。
お前は一生彼女を愛するだろう、
俺を大胆にも目覚めさせたゆえ。

アナクレオンの詩には、この歌に匹敵するものは何もないと言ってもいいだろう。この詩のジャンルにおいて、我々は古代人も現代人も凌駕しているのだ。ヴォルテール氏は言った。「我が国民が風雅な題材を実に多様な形で扱ってきた態度に、私は驚嘆する。もう使い古された題材だと思っても、いまだに新たな展開が見られる。時には、この歌のように、物事の本質そのものに斬新さを感じられることさえある :

鳥たちよ、もし毎年、君たちが気候帯を変えるのが、
陰鬱な冬が森の木々を裸にするとすぐならば、
それはただ、住む葉を変えるためでも
霜から逃れるためでもない。
君たちの運命が、
許しているのは花の季節にだけ愛することだ。
そして、その季節が過ぎると、別の場所を求める。
一年中愛するために。

この歌以上に生き生きとして、風雅で、繊細な歌を他に見ることができようか？

百回も言ったのにぼくの目よ、ぼくを破滅させる。
君たちは自分を抑えられない！
フィリスの魅力に、君たちは恐れを抱くの。

<p>Cependant vous la regardez. Pour former une douce chaîné Vous ne pouviez pas mieux choisir; Mais vous avez tout le plaisir; Et mon cœur a toute la peine.</p> <p>Ces fortes d'ouvrages suffisoient autrefois pour faire la réputation des Voiture, des Sarrafin, des Chapelle. Ce mérite étoit rare alors: aujourd'hui, qu'il est plus répandu, il donne fans doute moins de réputation; mais il ne fait pas moins de plaisir aux lecteurs délicats.</p> <p>Nous renvoyons, pour les chanfons satyriques, à l'article VAUDEVILLE. Nous finirons celui-ci par une Chanson faite par une dame de Toulouse, alors retirée à la campagne avec une société choisie d'amis.</p> <p>Dans cette aimable solitude L'ennui n'étend pas fon pouvoir; Le plaisir y fait notre étude, Et le bonheur notre sçavoir.</p> <p>Les plus beaux myrtes de Cythère Ne naissent que pour nous parer: Nous passons les jours à nous plaire, Et les nuits à nous defirer.</p> <p>Enchantés d'une aimable yvresse, Nous mêlons, dans nos tendres jeux, emo Les doux transports de la tendresse Aux larmes de l'amour heureux.</p> <p>Ici l'amour & la constance Enchaînent la félicité; Les pleurs se donnent à l'absence, Jamais à l'infidélité.</p> <p>Nos jours se levent sans nuage, Et nous paffons rapidement, Du sentiment au badinage Du badinage au sentiment.</p> <p>Nous ne citons point cette ode anacréontique comme un modele; mais pour faire remarquer certains défauts qu'on doit éviter dans les Chansons. L'art & l'esprit se font trop sentir dans celle-ci: les antitheses y font trop fréquentes, trop recherchées, & les pentées trop détachées les unes des au tres. On diroit que l'auteur ne s'est occupé qu'à briller; & ces fortes d'ouvrages ne doivent être que le fruit de l'occasion & du sentiment. Cette ode n'est pourtant pas sans mérite: la verffication en est aisée, harmonieuse; les pensées sont bien rendues, & le tableau en est charmant. Voyez PARODIES. VAUDEVILLE.</p>	<p>それでも君たちは彼女を見つめる。 甘美な束縛を築くために、 これ以上ないほど完璧な選択だった。 しかし、すべての喜びは君たちにあり、 ぼくの心は悲しみに暮れている。</p> <p>これらの重要な作品は、かつてはヴォワチュール、サラフィン、シャペルの名声を確立するのに十分であった。当時、このような功績は稀有なものであったが、今日ではより広く普及しているため、間違いなく以前ほどの名声は得られない。しかし、目の肥えた読者を満足させる可能性は十分にある。</p> <p>風刺歌については、『ヴォードヴィル』の項を参照。最後に、トゥールーズ出身で、その後親しい友人たちと田舎に隠居した女性が作った歌で締めくくりたいと思う。</p> <p>この心地よい孤独の中では、 退屈は力を発揮しない。 喜びは私たちの学びであり、 幸福は私たちの知識です。</p> <p>シテール島の最も美しいギンバイカは、 私たちが飾るためだけに生まれている。 私たちは昼間はお互いを喜ばせ、 夜はお互いをけなし合う。</p> <p>甘い陶酔に誘われ、 優しい戯れの中で、 私たちは優しさの穏やかな高揚感と 幸せな愛の涙を混ぜ合わせる。</p> <p>ここには愛と不変の 結ばれた幸福がある。 涙は不在に捧げられ、 不貞には決して捧げられない。</p> <p>私たちの日々は雲ひとつない夜明けを迎え、 私たちは素早く飛び移り、 感情から冗談のやり取りへ、 冗談のやり取りから感情へと。</p> <p>このアナクレオン風抒情詩を手本として挙げるのではなく、歌曲において避けるべき欠点を指摘するために挙げる。この抒情詩には芸術性と機知が過剰に表れており、対比が頻繁で不自然、そして詩節同士があまりにも乖離している。作者はただひたすら見せびらかすことだけを考えていたのではないか、そしてこれらの力強い作品は単なる偶然と感情の産物に過ぎないのではないか、と思われてしまうかもしれない。しかしながら、この抒情詩には長所がないわけではない。解釈は容易で調和がとれており、思想は巧みに表現され、全体像は魅力的である。『パロディ・ヴォードヴィル』を参照のこと。</p>
--	--

犬輔：エロティック歌として例示されている二作が K.307 と K.308 の歌詞なんですね。

教授：こんなところに引用されているとは驚いた。モーツァルト研究の盲点だ。K²⁰²⁴ では K.307 の歌詞はモネの 1765 年詩集を原典として挙げているが、K.308 の歌詞はモネの 1765 年詩集との齟齬が多いため「原典は不明」としていた^{註14}。鳥代さんが見つけたこの辞典が歌詞のほとんどの一致を見るため、原典であるとみておそらく間違いのないであろう。

鳥代：とは言え不一致が 3 箇所あります。I,2 が辞典では l'autre jour、B&H 初版では l'autr'jour となっていますが、綴りの縮約ですからモーツァルトあるいは編集者の判断で実施されたと考えることも可能です。III,1 は辞典が sa bouche (=his mouth)、初版が la bouche (=the mouth) ですので表現の違いです。これは意図的か、ミスかが問われますが、モーツァルト（あるいはグストゥル）が図 4 を転記するときのうっかりミスではないでしょうか。

Il avoit sa bouche vermeille ;

図 4 文学辞典の「淋しく暗い森で」から III, 1

IV,3 は辞典が d'une de ses flèches (矢の一本で)、初版が l'une de ses flèches (矢の一本が) で意味が異なります。表 2 から分かるように、初版の表記はユニークです。この 4 詩行の主語「彼」を、モーツァルトは意図的に「彼」と「矢」に分割したのではないのでしょうか。

4. ヴォルテールによる「鳥たちよ、毎年」賛美の出典

鳥代：ヴォルテールが詩を絶賛しているようなのですが、引用符の終わりが見当たりません。どこまでがヴォルテールの言葉なのか分からないのです。

教授：ヴォルテールがどう述べているかの確認は重要なことだ。併せて真正なヴォルテールの言葉かどうかの確認も必要だ。引用されたオリジナルを探し出して照合したまえ。

犬輔：それならヴォルテール全集がありますよ。

鳥代：今度は突き放すのね。膨大な全集の調査を抱え込むことになるのよ。

教授：心配しないでよい。鳥代さんの努力を買ってヒントを上げよう。全集から『フランス語詩と雄弁の美点と欠点についての知識 *Connaissance des beautés et des défauts de la poésie et de l'éloquence dans la langue française*』（1749 年）（詩は韻文、雄弁は散文のことだ）を読みたまえ。

鳥代：はい。では歌曲 *Chansons* に関する部分^{注15}を訳しましょう。

歌曲

フランスには、アナクレオンの歌曲よりも優れた歌曲が数多くあるが、どれも作者の名声を勝ち得ていない。こうした魅力的な小品は、栄光のためというよりはむしろ楽しみのために書かれたものだ。ここで私が語っているのは、才能を示すよりもむしろ精神を辱めるような、風刺的な寄席の歌ではない。私が語っているのは、恥ずかしがることなく記憶に残り、良識の手本となる、繊細で気楽な歌曲である。これはまさにその歌だ。ある女性がこう語る。

もし私がクーランジュを輝かせるような
快活さを持っていたら。
もし私がフォンタンジュを君臨させるような
美しさを持っていたら。
あるいは、美の女神たちの模範である
コンティのようだったら。
これらすべてはクレキのためだっただろう、
たとえ彼が私に不誠実であったとしても。

この歌の中で、どれほど多くの人々が当たり障りのない賛美を捧げられていることか。そして、これらの賛美のすべてが、この歌が捧げられた人の美德をどれほど際立たせていることか！しかし、何よりも、この最後の詩節にはどれほどの感動が込められていることか。

たとえ彼が私に不誠実であったとしても！
この生き生きとした風雅な二行詩に、それでも心を打たれない者はいないだろう。

恐れを鎮めようと酒を飲んでも無駄だ。
そして、不意に襲ってきた恋を追い払おうとも。
私は武器を作る。
愛しいアイリスのために。
ワインは彼女の軽蔑を忘れさせ、
彼女の魅力を囁く。

これほど心地よい歌が、我々がシダと呼ぶ草を讃えて作られたとは、誰が信じるだろうか。

緑のシダよ、君には
春を飾る花々のような輝きはない。
しかし、花々の美しさは儂い。
君はいつだって愛らしい。
君は魅力的な助け手となり、
地上で味わう最も甘美な喜びを。
恋人たちの寝床となり、
酒を飲む者にはグラスとなる。

我が国民が風雅な題材を実に多様な方法で扱ってきた仕事に、私はいつも驚かされる。もう使い古された題材だと思っても、いまだに新しい展開が見られる。時には、この歌のように、物事の本質そのものに斬新さを感じられることさえある。あまり知られていない作品だが、繊細な感性を持つ読者にはぜひ知っていただきたい作品だと私は思う。

鳥たちよ、もし毎年、君たちが気候帯を変えるのが、
陰鬱な冬が森の木々を裸にするとすぐならば、
それはただ、住む葉を変えるためでも
霜から逃れるためでもない。
君たちの運命が、
許しているのは花の季節にだけ愛することだ。
そして、その季節が過ぎると、別の場所を求める。
一年中愛するために。

こうした小さな仕事をうまくこなすには、繊細さと感性の精神をもって、調和を心に留め、高く上がりすぎず、低く落ちすぎず、そして長く留まりすぎないようにしなければならない。

「小さな事柄における苦勞」 ウェルギリウス『農耕詩』(Georgics) 第 4 巻より

犬輔：ヴォルテールは「鳥たちよ、毎年」だけでなく、二つのバッカスの歌も高く評価していたんですね。文学辞典はこれらの記述を参照しているんだ。

鳥代：賞賛の文言を読むと、辞典の「時には、この歌のように、物事の本質そのものに斬新さを感じられることさえある」というところまでがヴォルテールの言葉だということが確認できました。但し「扱ってきた仕事 *maniés* に、私はいつも *toujours* 驚かされる」を辞典では何故か「扱ってきた態度 *traités* に、私は驚嘆する」に変えて引用していますが。

教授：だが、それに満足してはいけない。じつは『フランス語詩と雄弁の美点と欠点についての知識』はヴォルテールの真筆かどうか疑いがあるのだ。『ヴォルテール全集：注釈とヴォルテールの生涯に関する注記付き、第9巻。文学雑録 - コルネイクに関する解説』（パリ、1846年）の132ページの説明を読んでほしい¹⁶。

鳥代：気が進みませんが、訳しましょう。

以下の2つの著作は、一貫してヴォルテールの著作とされてきたが、ヴォルテールの著作ではないという証拠がないため、本書に収録する。

『フランス語詩と雄弁の美点と欠点についての知識』と題された著作は、ヴォルテールの指導の下、彼の弟子の一人によって執筆されたと思われる。彼の文学作品と同様の趣味原理と見解を示している。この作品は、ヴォルテールが、最も著名な文学者たちからなる大規模で容赦のない陰謀団と対峙しなければならなかった時代に出版された。彼らは、彼の才能に対する熱意が嫉妬を上回っていた少数の若者、あるいは親切な行為によってヴォルテールが味方につけた若者たち以外には、何の支えもなかった。彼の手紙を読むと、敵に提示したい作品の概略や主要な思想を、時折ヴォルテールに提供していたことがわかる。

『聖ルイの賛辞』[以下割愛します]

犬輔：「ヴォルテールの指導の下、彼の弟子の一人によって執筆されたと思われる」ならば、ヴォルテールが「鳥たちよ、毎年」を絶賛したという事実そのものが疑わしくなりますよ。

教授：気を取り直して、もう一つ調べてごらん。パリで1764-66に出版されていた文学誌『ヨーロッパ文学報 *Gazette littéraire de l'Europe*』の1764.6.20付の号に、ヴォルテールが編集者たちへ宛てた文書がまとめられており、そこにも「鳥たちよ、毎年」が出てくる。

鳥代：全集の、「文芸誌の執筆者の皆様へ」という章に載っている1764.6.6付け文書ですね¹⁷。

フランチェスコ・ペトラルカ伝の基となる回想録（四つ折り2巻）が、アムステルダムのアークステ社とメルクス社から印刷されたばかりです。もしこれがこの歴史書の単なる準備のための回想録に過ぎないのであれば、『ペトラルカ伝』が非常に充実した作品となることを期待せざるを得ません。

ペトラルカは14世紀のヨーロッパで最高の詩人であり、まさに唯一の詩人であったことは事実です。しかし、彼の作品のほとんどが愛を主題としており、ラシーヌやキノーに豊かに見られる感情の美しさに匹敵するものは一つもありません。あえて言えば、私たちの言語には、ペトラルカの作品よりも繊細で独創的な歌が膨大に存在すると言えるでしょう。そして、このジャンルがあまりにも豊富なので、それを自分の功績だと称えることなど考えられません。ペトラルカの歌の中に、この歌に匹敵する歌は一つもないと私は信じています。

鳥たちよ、もし毎年、私たちの土地を去るのが、
陰鬱な冬が森の木々を裸にするとすぐならば、
それはただ、住む葉を変えるため、
そして霜から逃れるためではない。
君たちの運命が、
許しているのは花の季節にだけ愛することだ。
そして、その季節が過ぎると、別の場所を求める。
一年中愛するために。

犬輔：こちらは間違いなくヴォルテールの言葉なんですね。14世紀イタリアの抒情詩人ペトラルカと比較して、より繊細で独創的な歌だと評価しています。疑わしいものも含めたこれら2件の言説が「鳥たちよ、毎年」の評判を高めたことは疑いのないところでしょう。

教授：では、これらヴォルテールによるとされる評価をグストゥルがどのようにして受け止め、そしてモーツァルトに伝達したか、考えてみよう。

5. マンハイムの文化事情

犬輔：フランス語の資料が多かったので鳥代さんに頼っていましたが、ここからはぼくが引き受けます。まずヴェンドリング家がフランス趣味であったという証言から見ておきましょう。ミュンヘン滞在中のモーツァルトが父レーオポルト宛ての1780.12.5付の手紙でこう書いています（父が前便でマレスケル夫人が命名祝日のお祝いを言い訪問してきて、フランス語の挨拶をしながら頬を向けキスを迫ってきたので、恥ずかしい思いをしたと打ち明けていたことへの返信です）。

キスには少し慣れる必要があるでしょう。その間、マレスケル夫人と練習を続けてください。——なぜなら、——ここドローテア・ヴェンドリングの家（ここはまだすべてが半分フランス風です）に来るたびに、母と娘にキスをしなければならぬからです。ただし、注意点として、化粧が青くならないように顎にキスしてください。（ドイツ語原文から訳し直しました）

教授：だが、モーツァルトはヴェンドリング家にネガティブな印象を持ってもいた。K.307をレーオポルトに送るとい手紙の4日前の1778.2.4にはこう書いている。

ヴェンドリングはほんとうに誠実で、善良なひとですが、いかなる宗教ももっていません。家族のひとたちもみんなそうです。彼の娘が《愛妾》であったと言うだけで、充分でしょう。

鳥代：レーオポルトも1778.2.25/26にこう書いています。

息子よ、おまえがくこの仲間たちと>は一緒にパリに旅行しなかったのは、もう知らせたことだが、まったくよくやりました。<父親ともあろうものが、自分の娘を>利害関係からあんな風に投げ出すなんて憎むべきことだし、それにどうして彼の友情を頼りにできるだろうか。彼は自分が血を分けた娘を私利私欲のために犠牲に供し、そうすることで自分の名誉を、全土に、それにまた隣国にも危険に曝しているからです。
(山括弧内は家族コード、すなわち暗号で記されていました)

犬輔：不倫の話は鳥代さんにお預けにされ、我慢してきましたが、もう始めてもいいでしょうか。

鳥代：いいわよ。でも、三流週刊誌のような憶測に満ちた話はしないでね。

犬輔：はい、そのために信頼が置けそうなプファルツ宮廷駐在のザクセン大使、アンドレアス・フォン・リアクール伯爵(右図)が書いた外交報告書を紹介します^{注18}。まず1772.5.12付けです。

<プファルツ選帝侯が新たな愛妾を選んだことを示唆する兆候があり、その選択は、若さゆえの魅力と年齢とともに確実に磨かれるであろう教養ある知性を兼ね備えた、ある歌手の娘に下ったようだ。この娘を自らの野望のために犠牲にした母親は、目的達成のために手段を選ばない、意地悪で傲慢、そして良心のかけらもない性格である。彼女が許されるならば、間違いなく国政に干渉しようとするだろうし、娘の影響を通じて君主に対する一定の影響力を獲得しようとするだろう。>
(山括弧内は数字コード、すなわち暗号で記されていた部分です。以下同じ)



リアクール伯

鳥代：こちらはレーオポルトとは異なり、母親ドロテーアの方を糾弾していますね。本当にそうだったのでしょうか。確かに父親のヴェンドリングは1772年の春にはロンドンにいて、J.C.バッハと知り合い、フルート演奏で舞台に立っていても、マンハイムを不在にしました^{注19}。

犬輔：次は1772.7.14付です。

プファルツ選帝侯妃[エリーザベト・アウグスタ]とクリスティーネ公女は、一昨日選帝侯と会食するためにこの地に到着し、その夜、イタリア語の幕間劇『愛の島』を鑑賞した後、オッガースハイム[選帝侯妃はこの地に別居していた]に戻った。
<選帝侯妃が公演中、あまり上機嫌ではなかった様子うかがえた。それは選帝侯が、かつての愛人ザイフェルトの代わりに若いヴェンドリングを選んだためであった。ザイフェルト公女[前述のクリスティーネ公女のことと思われる]はこの若いヴェンドリング、特に前述の作品に出演したプリマドンナである彼女の母親に対して、並々ならぬ好意を示していた。この母親は非常に狡猾であるため、いずれ選帝侯に対して過大な権力を握るのではないかと懸念されている。しかし、選帝侯妃は、オッガースハイムでの彼女の臨時出費を選帝侯がすべて負担し、かつ彼女に想いを寄せているため、こうしたことには目をつぶるだけの分別はあった。しかし、彼女は心の中で深く傷つき、それを親友たちに隠そうとはしなかった。>

鳥代：奇しくもカール・テオドール選帝侯のお妃のお名前もエリーザベト・アウグスタなのですね。夫の新しい不倫相手が同じ名前とは。

犬輔：そして1772.7.18付です。

<選帝侯は、貧困と無名から引き抜かれた前任者たちとは全く異なる教育を受けた新しい愛妾にひどく当惑し始めていたと言われる。彼女は高価な物に強い欲望を抱いているが、選帝侯はそれを全く好まない。というのも、彼は極めて儉約家で、特に4人の子供がいるためである。さらに子供が増えるのを避けるため、エリーザベトに夫を与えるつもりだという噂もある。[生まれた子を夫の子にするためと思われる]しかし、彼女が今の地位に留まるのか、それとも将来の夫への道を辿らざるを得ないのかは分からない。>

鳥代：一方、マンハイムのためのオペラ作曲を依頼されていたJ.C.バッハが1772.9.12にロンドンから到着し、オペラ《テミストクレ》の完成とリハーサル、そして慣例通り、初演の指揮を行うこととなります。おそらく父ヴェンドリングは娘との結婚を望んでいたものと思われ(選帝侯を付度してのことかは不明です)。でも、この間にグストゥルは17歳年上のクリスティアーンのプロポーズを断ったのでした^{注20}。

犬輔：最後に1772.10.13付です。

<選帝侯が新しい愛人を手放したことを皆が喜んでいるが、それは選帝侯自身の落ち度によるものではなく、むしろ彼女の両親が非常に陰謀を企て、悪意に満ちていたためである。彼らは既に宮廷改革と多数の官僚の排除を企み、将来の名声と権力獲得を期待していた。>

鳥代：《テミストクレ》は1772.11.5に初演され、満員であったと報告されています。J.C.バッハはホルツバウアーの後任として宮廷楽長を狙うこともできました。でも、上演成功の喜びの余韻に浸る暇も惜しんで1773年早々に帰国したのは、バッハ=アーベル・コンサート準備のためだと言われている^{注21}、失恋の痛手もあったのではないかと思料します。

教授：リアクール伯爵はヴェンドリング夫妻が陰謀を企んでいたと言うが、このあとも一家が引き続きマンハイムそしてミュンヘンで宮廷劇場での演奏活動を続けていることから、根も葉もない噂話と言わざるを得ない。それでも愛人期間の目安はこれで知ることができる。

鳥代：犬輔さんは淡々と引用を続けたけれど、本当に知りたいことは何なの。

犬輔：1777.11.20 の母マリーア・アンナからレーオポルトへの手紙でグストゥルが美人だと言っています。肖像画はなく、かろうじてシルエットがありますが（著作権がはっきりしないので掲載を控えます）^{注22}、顔立ちは分かりません。どのような美人だったのでしょうか。

一人娘がいて、とても美人で、英国の「ヨハン・クリスティアーン・」バッハがお嫁さんにもらおうとした人です。彼女はもう一年半以上も病気で、熱がなかなか下がらないのです。この娘さんにはとてもお気の毒です。

鳥代：女性側から殊更美人と言われるということは見かけだけではないかもしれないわね。他の人からの評価はないのかしら。

教授：詩人で音楽家のクリスティアーン・フリードリヒ・ダニエル・シューバルト Christian Friedrich Daniel Schubart (1739-91) が次のように書いている^{注23}。

この音楽家夫婦の娘は、かつては確かにオーケストラで一番の美人 erste Schönheit だったが、生まれつきの冷たい性格のため、歌や鍵盤楽器の演奏ではほとんど取るに足らない存在になってしまった。

犬輔：いつの時点のことを述べているのか分かりませんが、「生まれつきの冷たい性格」などどうして言えるのでしょうか。彼女の幼馴染からの評価を参照したのだろうか。

鳥代：それよりもリアクール伯爵の報告の中でグストゥルのことを「若さゆえの魅力と年齢とともに確実に磨かれるであろう教養ある知性を兼ね備えた娘」と言っている方が重要だと思います。選帝侯が求めている「教養ある知性」とは何だったのでしょうか。

教授：まだ触れられていない情報を授けよう。ジャン＝ヴィクトル・オカールが「マンハイムは“小さなパリ”と呼ばれていた。フランスの影響が色濃く残っていたからだ。選帝侯はヴォルテールの親友だった」と述べている^{注24}。事実を調べなさい。

犬輔：はい。フリーメイソンの研究資料がありました^{注25}。

ドイツにおけるフランス系フリーメイソンの普及に大きく貢献した七年戦争勃発以前から、この地には「聖シャルル・ド・リュニオン」という名のフランス系スコットランド人のロッジが存在していた。このロッジは、選帝侯カール・テオドール (1743-1799) が宮廷に招いた教養あるフランス人によって設立されたもので、おそらくマンハイムでは芸術、特に舞台芸術が復興期を迎えていた時期であったと思われる。1753 年から 1764 年にかけて、カール・テオドールはヴォルテールと活発な書簡のやり取りを続け、また何度か親密な会合も行っている。ヴォルテールは 1753 年にシュヴェツィンゲンにある選帝侯の夏の離宮を訪れ、1754 年の冬にはマンハイムで再び長期滞在し、1758 年にはシュヴェツィンゲンに短期間滞在した。これらの訪問中、ヴォルテールは俳優たちと悲劇の稽古を行い、カール・テオドールと舞台俳優たちに多大な影響を与えた。当時、オペラと演劇はかつてないほど隆盛を極めていた。

鳥代：グストゥルはこのような文化の中でヴォルテール (右図) のことを勉強していたのではないかと思います。モーツァルトに歌詞を提供するに際してヴォルテールが推薦している詩を選んだのも当然だと言えるでしょう。ただしモーツァルトにそう言ったかどうかは分かりませんが。



ヴォルテール

犬輔：モーツァルト父子はヴォルテールを作家としては認めていました（詩作の際にスケッチを友人に読み聞かせ、意見を聞いて修正するという方法を作曲時にも見習うようにとレーオポルトは勧めた）^{注26}が、哲学者としては無神論者として嫌っていました^{注27}。彼が詩の絶賛者であったことを知っても作曲に影響はなかったでしょう。

教授：レーオポルトは 1785.10.20 の手紙で、グストゥルが「いまはゼーアウ伯の愛人」と言っている。ヨーゼフ・ゼーアウ伯 Graf Joseph Anton von Seeau (1713-99) はミュンヘンの宮廷音楽監督としてモーツァルトに《偽りの女庭師》、《イドメネーオ》を依頼し、協力を惜しまなかった人物だ。この時点で彼は 72 歳（グストゥルは 33 歳）、オペラ監督はテオバルト・マルシャンに代わっていたが、選帝侯が亡くなるまで絶大な権力を保持していた（右図）^{注28}。振るわない歌手であったグストゥルが、（再び両親に唆され？）、舞台活動の便宜を期待してなのか、あるいは音楽監督のような新しい職務を期待してなのか、我々には分からない。



ゼーアウ伯

鳥代：この頃のグストゥルの活動として、1782/83 のシーズンにヴィーンで歌い、ミュンヘンにおけるゲオルク・ベンダ作曲のジグシュピール《ローメオとユリー Romeo und Julie》の上演 (1784.11.13) でユリー役を歌い大成功を収めたとも言われますが^{注29}、1784.11.12 の上演記録はあるものの、歌手名は分かりませんでした。すでに言いましたが、生涯にわたっての活動に関しても同様で、ほとんど謎の多い人物です。

6. まとめ

鳥代：アリエッタ「鳥たちよ、毎年」K.307 と「淋しく暗い森で」K.308 のテキストは、アウグスタ(グストゥル)・ヴェンドリングがアントワヌ・サバティエ Antoine Sabatier (1742–1817) 編の『文学辞典 Dictionnaire de littérature』(1770) から選んだものと考えられます。この辞典はフランス文学に関するもので、特に「鳥たちよ、毎年」はヴォルテールが絶賛した詩であることを紹介しています。当時マンハイムは選帝侯カール・テオドール自らヴォルテールと親交を結ぶなどフランス文化に染まっており、ヴェンドリング家も例外ではありませんでした。就職活動を続けるモーツァルトにとって、次のパリへの訪問に先立つタイミングでのフランス語詩の作曲には運命的な出会いをも感じます。

犬輔：モーツァルトの手紙によれば、K.307 を作曲したあと、まだ数曲のフランス語のアリエッタを約束していて、そのひとつが K.308 であった、と解釈できます。実際に作曲されたのはこれら二曲だけですが、三曲目以降もこの文学辞典にある詩から選ばれていたのかも知れません。また、モーツァルトは常に歌手に合わせた曲を作曲しました。グストゥルは K.307 をたとえようもないくらい見事に歌ったといいますが、K.308 もグストゥルの特徴に合わせて書いたと考えられます。それにしても新全集は、作曲時に参照された詩であることが強く示唆される B&H 初版の歌詞を信用せず、原点だと信じた詩集に即して修正してしまっており、また響きがよいという理由から現代綴りを提案するなど^{注30}、詩と音楽の不一致も顧みない、結果としてモーツァルトの意図を度外視した校訂となっています。

教授：モーツァルトは以後パリ滞在中においてすらフランス語の曲は書かなかった。マンハイムにおける出来事は青年モーツァルトの飛躍の可能性へのいくつかの試みの成果ととらえるべきであろう。

注 1 : Corneilson, Paul (2006). A Context for Mozart's French Ariettes: The Wendling Family and Friedrich Schiller's *Kabale und Liebe*, in: *Current Musicology*, No. 81 (Spring 2006) ∞ この論文の主旨はヴェンドリングの家族がシラーの『たく(ち)みと恋』のモデルになっているのではないかというものであるが、ここでは触れない。

注 2 : Goldoni, Carlo & Piccinni, Niccolò (1769). *La buona figliuola zittella*. *Dramma giocoso per musica da rappresentarsi alla corte elettorale palatina in occasione del felicissimo giorno del nome del Serenissimo Elettore per comando della Serenissima Elettrice l'anno 1769*. - Mannheim : Stamperia Accademica Elettorale, [1769]. Sartori 1990 04206 ∞

注 3 : Wikipedia: *La buona figliuola* ∞

注 4 : 前掲 Corneilson (2006)

注 5 : Nottebohm, Gustav (1877). *Mozarts Werke, Serie VII: Lieder und Kanons, Bd.1*, Leipzig: Breitkopf & Härtel (1877) ∞ ∞

注 6 : Ballin, Ernst August (1963) *NMA III/8: Lieder, Notenedition* (1963) ∞

注 7 : XXX *Gesänge mit Begleitung des Pianoforte*, Leipzig: Breitkopf & Härtel (1799) ∞

注 8 : Ballin, Ernst August (1964) *NMA III/8: Lieder, Kritischer Bericht* (1964) ∞

注 9 : Monnet, Jean (1765). *Anthologie françoise, ou Chansons choisies, depuis le 13e Siècle jusqu'à présent, Tome 1, Paris 1765* ∞

注 10 : Goldsack, Christopher (2015). *Singing in French, lower voices, The Melody Treasury* ∞ では「権威ある現代の版 [新全集を指す]の中には、古いテキストに戻しているものもあるが、歌う上での喜びは明らかに劣る」と音楽的評価を下している。実用譜であるが、楽曲の本質に迫った解釈をしている。

注 11 : *Singing in French, higher voices* (2016), *The Melody Treasury* ∞

注 12 : Le Sage, Alain René (1731). *Le Théâtre De La Foire, Ou L'Opera Comique: Contenant Les Meilleures Pieces qui ont été représentées aux Foires de S. Germain & de S. Laurent : Enrichies d'Estampes en Taille douce, avec une Table de tous les Vaudevilles et autres Airs gravez notez à la fin de chaque Volume* ∞

注 13 : ①②④⑤の歌詞異同に関する情報は前掲 Ballin (1964) による

注 14 : Zaslav, Neal (2024). *Ludwig Ritter von Köchel, Köchel-Verzeichnis, Thematic Catalog of the Musical Works of W.A. Mozart*, Edited by Neal Zaslav, Commissioned by the Salzburg Mozarteum Foundation, Presented by Ulrich Leisinger, Breitkopf & Härtel ∞

注 15 : Voltaire (1749). *Connaissance des beautés et des défauts de la poésie et de l'éloquence dans la langue française*, in: *Œuvres complètes de Voltaire, Garnier, tome 23* ∞

注 16 : *Œuvres complètes de Voltaire: avec des notes et une notice sur la vie de Voltaire, Tome neuvième. Mélanges littéraires – Commentaires sur Corneille*. Paris, Furne et Cie, libraires-éditeurs, 1846 ∞

注 17 : 前掲 *Œuvres complètes de Voltaire*

注 18 : Riaucour, Andreas (1772). *Acta, Des geh: Rath, Gr: von Riaucour, Abschickung an der churpfälzischen Hof und dessen daselbst geführte Negociation betr: anno 1772*. 本稿では前掲 Corneilson (2006) から引用した。

注 19 : 前掲 Corneilson (2006)

注 20 : 前掲 Corneilson (2006)

注 21 : Gärtner, Heinz (1994). (trans. by Reinhard Pauly). *John Christian Bach: Mozart's Friend and Mentor*, Portland, Oregon, Amadeus Press, 1994

注 22 : Würtz, Roland (1979). *Der geliebte Schatten*, in: *Das Mannheimer Mozart-Buch*, 1979

注 23 : Schubart, Christian Friedrich Daniel (1839). *C.F.D. Schubart's des Patrioten gesammelte Schriften und Schicksale*, J. Scheible's Buchhandlung, 1839 ∞

注 24 : Hocquard, Jean-Victor (1987). *Mozart: l'amour, la mort*, Libr. Séguier/M. Archimbaud, 1987 ∞

注 25 : Schwarz, Wilhelm (1896). *Geschichte der gerechten und vollkommenen St. Johannis-Loge "Karl zur Eintracht" in Mannheim: Festschrift zur Feier der fünfzigjährigen Wiedererstehung dieser Loge, Selbstverlag der Loge, 1896* ∞

注 26 : 野口秀夫 (2026). レチタティーヴォとアリア「もうたくさん、あなたが勝ったのだから/ああ、私を見捨てないで」K.486a — ドローテア・ヴェンドリングとともに — 神戸モーツァルト研究会 第 334 回例会 ∞

注 27 : ヴォルテールの訃報を聞いたレーオポルトは 1778.6.29 に「ヴォルテールも亡くなった！しかも、彼はそのまま [変わることもなく] 亡くなった。死後の名声を得るためには、もっと良い方法があったはずだ。ヴォルフガングは 1778.7.3 に「さて、もうご存知かもしれませんが、神を信じない極悪非道なヴォルテールが、いわば犬のように、動物のように死んだというメッセージをお伝えします。これが報いです！」と書いている。

注 28 : バイエルン州立図書館 絵画アーカイブ蔵の 1780 年頃の風刺画。図書館の解説はこう述べている。「ゼーアウは最終的にクリスティアーン・カンナビヒが創設したアマチュアコンサートの指揮も引き継ぎ、ミュンヘンのすべての公演会場を支配するようになった。1799 年に選帝侯カール・テオドールが死去すると、彼は辞任し、数十年にわたる財政上の不正を隠蔽するために記録の大部分を破棄し、わずか 12 日後に自身も死去した」∞

注 29 : *Le site des premiers interprètes baroques et classiques, Elisabeth Augusta Wendling 1752–1794 dite Gustl* ∞

注 30 : 前掲 Ballin (1964) では「mais je devois は mais je devais と現代化することにより、調音結合と共同調音により歌いやすさがかなり優れるため、テキストの異形として提案されている」と解説されている。

(作成：2026 年 4 月 24 日、改訂：2026 年 4 月 28 日)

後日の談話室 —— 「鳥たちよ、毎年」の二つのバージョンのいずれが原典に近いか？

鳥代：「鳥たちよ、毎年」には、quittez nos climats（以下 A 系統）あるいは changez de climats（以下 B 系統）がありますが、ヴォルテール関連の『文芸誌の執筆者の皆様へ』（1764 年）が A 系統、『フランス語詩と雄弁の美点と欠点についての知識』（1749 年）が B 系統であったことには気づいたでしょうか。

犬輔：えっ、鳥代さんが和訳で紹介していたので気づきませんでした。同一人物でも揺れがあるんですね。尤も『詩と雄弁の知識』はヴォルテールの真筆か疑問ですが。

教授：では、二つの系統のいずれがフェランの原典に近いかを調査してみなさい。

鳥代：はい。フェランの生前（1719 年以前）の出版物は見つかりませんでした。その後の状況についてまとめました。A 系統と B 系統に分けて、表 4 に出版順に配列します。

表 4 「鳥たちよ、毎年」の歌詞異形

連、行		㊦	㊧	㊨	㊩	㊪	㊫	㊬	㊭	㊮
I, 1	vous quittez nos climats		●	●	●	●	●	●		
	vous quittez ces climats	●								
	vous changez de climats								●	●
I, 3	pour changer de feuillages		●	●	●	●	●	●	●	●
	pour changer des ombrages	●								
I, 4	et pour éviter		●	●	●		●	●		
	ni pour éviter	●				●			●	●
I, 4	nos frimats		●	●	●	●		●	●	●
	les frimats	●					●			
II, 1	mais votre destinée		●	●	●	●	●	●	●	●
	mais s'est que vôtre destinée	●								
II, 2	qu'à la saison			●	●	●			●	
	qu'en la saison	●	●							
	que la saison									●
II, 3	et quand elle est passée			●						
	et quand elle a passé	●	●		●	●			●	●
	et quand il est passé						●	●		
作者 表記	フェラン氏			●		●		●		
	デ・ブリュイ氏	●								
	無記名		●		●	●		●	●	●
ジャンル	アンソロジー・歌集			●	●	●	●	●		
	修辞書・百科系								●	●
	その他	●	●							
系列		A 系列					B 系列			

- ㊦ 『メルキユール・ド・フランス：国王に捧げる・入手可能な年 1725 年』（楽譜付き）∞
- ㊧ ヴォルテール『文芸誌の執筆者の皆様へ』（1764）∞
- ㊨ モネ『詩集』（楽譜付き）（1765）∞
- ㊩ 『様々な著者からの様々な抜粋』第 10 巻（1777）∞
- ㊪ アンリ・ラリヴィエール『フランス詩集』第 1 巻（1816）∞
- ㊫ アドルフ・リカール『紳士淑女の皆様』（1859）∞
- ㊬ ナポレオン・デュクロス『フランスのパルナッソス』（1878）∞
- ㊭ ヴァルテールの弟子（？）『フランス語詩と雄弁の美点と欠点についての知識』（1749）∞
- ㊮ デイドロ／ダランベール他『百科全書』第 17 巻（1765）（ルイ・ド・ジョクール執筆）∞
- ㊯ 『文学辞典』（1770）∞

犬輔：A 系列は詩集・歌集（朗読・歌唱用テキスト）に、B 系列は修辞書・百科系（権威的テキスト）にきれいに分かれていますね。

鳥代：メルキユール・ド・フランスの記事は A 系列の中でも異色です。何故でしょう。

教授：そこでは、新製品発売の紹介と、戯曲のあらすじの紹介のと間に歌曲 CHANSON として単独で掲載されている。記名されている作者デ・ブリュイ氏とはフランスの神学者であり劇作家であったダヴィッド・オーギュスタン・ド・ブリュイ David-Augustin de Brueys (1641–1723) であると考えられ^{注31}、添付された楽譜のタイトル「エール・セリュール Air sérieux」は——陽気な「酒の歌 Air à boire」と対をなす——感情的で洗練された歌詞と旋律を特徴とする歌曲のジャンルであり^{注32}、彼の劇中歌としてアレンジしたものだったのであろう。

犬輔：ではこれを例外として扱うとしても、初期に A 系列をベースとしてアレンジしているからには、原典が A 系列であった可能性が浮上します。さらに A 系列にフェランの作であることが明記されているものが散見されることもそのことを示唆します。

教授：歌うテキストとしての流通とはほぼ同時に、修辞書・辞書・百科などに例示されていったということであろう。その後両系統ともに手を加えられていった。「原典は一つでも、伝承は複数の“安定形”に分岐する」というのは 18 世紀テキストの典型的な状況である。

犬輔：ところで、『百科全書』は名前だけは知っていますが、読んだことがありません。どのように紹介されているんでしょう。興味がありますので、訳してくれませんか。

鳥代：いいわ。「温帯」という項目の所よ。長い説明なので、抜粋するわね。

温帯 (現代地理学)：二つの温帯は、熱帯と氷河の間、つまり熱帯と極圏の間にあります。それぞれ幅は 43 度です。北回帰線と北極圏の間にある温帯（私たちが住んでいる地域）は北温帯と呼ばれ、南回帰線と南極圏の間にある温帯は、私たちの地域に対して南温帯と呼ばれます。

これら 2 つの地域は、熱帯と氷河の間に位置しているため温帯と呼ばれていますが、その両端は極端に寒かったり暑かったりするため、温帯という名にふさわしいのは中央部のみであり、その他の地域は、他の地域との距離に応じて、寒すぎたり暑すぎたりします。

温帯地域に住む人々は、太陽が真上に来ることは決してなく、地平線が太陽のすべての緯線を横切るため、太陽は毎日昇り沈むので、日の長さは常に 24 時間未満です。春分と秋分は通常の時期に 1 年に 2 回起こり、北極は常に 23.5 度より高く、南極は 66.5 度より低いいため、春分と秋分の時期以外は昼と夜の長さが等しくありません。

[…]

北温帯地域には、ヨーロッパ全域、アフリカ（黄金のケルソネソス半島とインド洋の島々を除く）、北アメリカの大部分、大西洋、太平洋が含まれることは誰もが知っている。

南温帯には国は少なく、そのすべてが知られているわけではありませんが、多くの海、南アメリカの一部、モノモタパ、喜望峰、マゼラン諸島の大部分、ブラジルの一部、チリ、マゼラン海峡、そして大西洋、インド洋、太平洋の大部分が含まれています。

[…]

日本では、国土が海峡〔水道、瀬戸〕によって分断され、海に囲まれているため、冬は雪が多く、湿気が多く、同じ緯度の他の国々よりも寒い。

最後に、スペイン、イタリア、そして何よりもフランスの一部地域ほど、恵まれた気候の土地は他にありません。ここでは、冬の霜が恐れることなく力と豊穡を育みます。変化に富み花咲く春が、穏やかで恵み豊かな雨に照らされ、自然の活力を解き放ちます。太陽が雲を照らし、生命を与える暖かさを生み出し、人、動物、植物に影響を与え、大地を果実で覆い、それらを成熟させます。黄金色の畑で穀物の穂が揺れる秋が、農夫の手に鎌を置き、農夫はケレス、ポモナ、そして騙されやすいセメレの愛する息子からの贈り物である豊かな収穫を感謝して収穫します。これが私たちの地域の四季です。しかし、私の声は弱すぎてその喜びを歌い上げることはできません。そこで、トンプソン氏による、これらの季節の輝かしく精神的な描写をもう一度借りることにします。彼のミュージックは、読者に喜びを与えるだけでなく、多くのことを教えてくれます。あなたは、彼が描写においていかに多様性、調和、イメージ、そして感情を巧みに用いているかを、三度目に判断することになるでしょう。

月が牡羊座を離れ、明るい牡牛座に入ると、大気は広がり、冬のベールは消え、地平線には淡い雲が散りばめられます。心地よい風が吹き出し、大地をほぐし、生命を蘇らせます。雪から逃れるために。

雪は消え、まもなく丘陵は
緑に覆われるだろう。
大地は胸を開き、装いを新たにす。
川は再び川床を流れる。

[…]

年が暮れ始めると、大地の水蒸気が凝結し、空気中の蒸気が濃くなり、霧が現れて丘陵地帯を覆います。太陽の光は弱々しくなり、しばしば照らすよりも眩しく、迷信深い国々を恐怖に陥れるほど大きく輝く球体をいくつも見せます。すると、ツバメ *hirondelle* たちが空高く舞い上がり、地面すれすれを飛びます。春が彼らを再び呼び戻し、愛の翼に乗せてこの軽やかな群れを私たちの元へ連れ戻すまで、ツバメたちは暖かい土地へと旅立ちます。

鳥たちよ、もし毎年、君たちが気候帯を変えるのが、
陰鬱な冬が森の木々を裸にするとすぐならば、
それはただ、住む葉を変えるためでも
霜から逃れるためでもない。
君たちの運命が、
許しているのは花の季節にだけ愛することだ。
そして、その季節が過ぎると、別の場所を求める。
一年中愛するために。

しかし、晩秋には、光が至高の輝きを放ち、限らない静寂が広がる瞬間が訪れます。流れるというよりはさざ波を立てるように見える小川は、その流れが定まらず、露をまとった雲が太陽を覆い、そのベールを通して、穏やかな世界に柔らかな光を投げかけます。まさにこの時、知恵に導かれた人々は、都会に跋扈する怠惰な群衆から逃れ、虚栄に満ちた芸術の世界を飛び越え、悪徳の卑しい思想を踏みにじり、激しい情熱の解毒剤である静寂を求め、田園の散策の中で至福の平和を見出すのです。

[…]

犬輔：『百科全書』は物語調で説明しているんですね。特にこの項目では温帯における季節の移り変わりを詩を交えながら歳時記のように綴っているんだ。

教授：「鳥たちよ、毎年」は A 系列が先で B 系列が後という可能性が高いが、双方に優劣がないことは並列して現在まで使われていることが証明している。そして、このことがモーツァルトの歌詞のテキスト問題を複雑にしたのだが、系列への考察とモーツァルトがどの資料を原典としたかは全く別の問題であることを強調しておきたい。

注 31 : Wikipedia: David-Augustin de Brueys ∞

注 32 : Wikipedia: Air à boire ∞